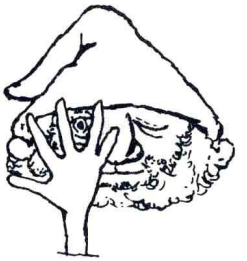
こどもの
世界文学

993.7 バラージュ、ベラ

ほんとうの空色(そらいろ)

ベラ＝バラージュ作
徳永康元(とくながやすもと)訳

講談社　1971（昭和46年）
238p　24cm（こどもの世界文学第25巻）
小学1～3年
（原著）Az igazi egszínkék, 1925; Balázs Béla

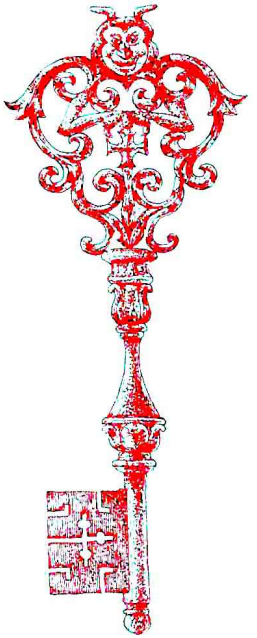


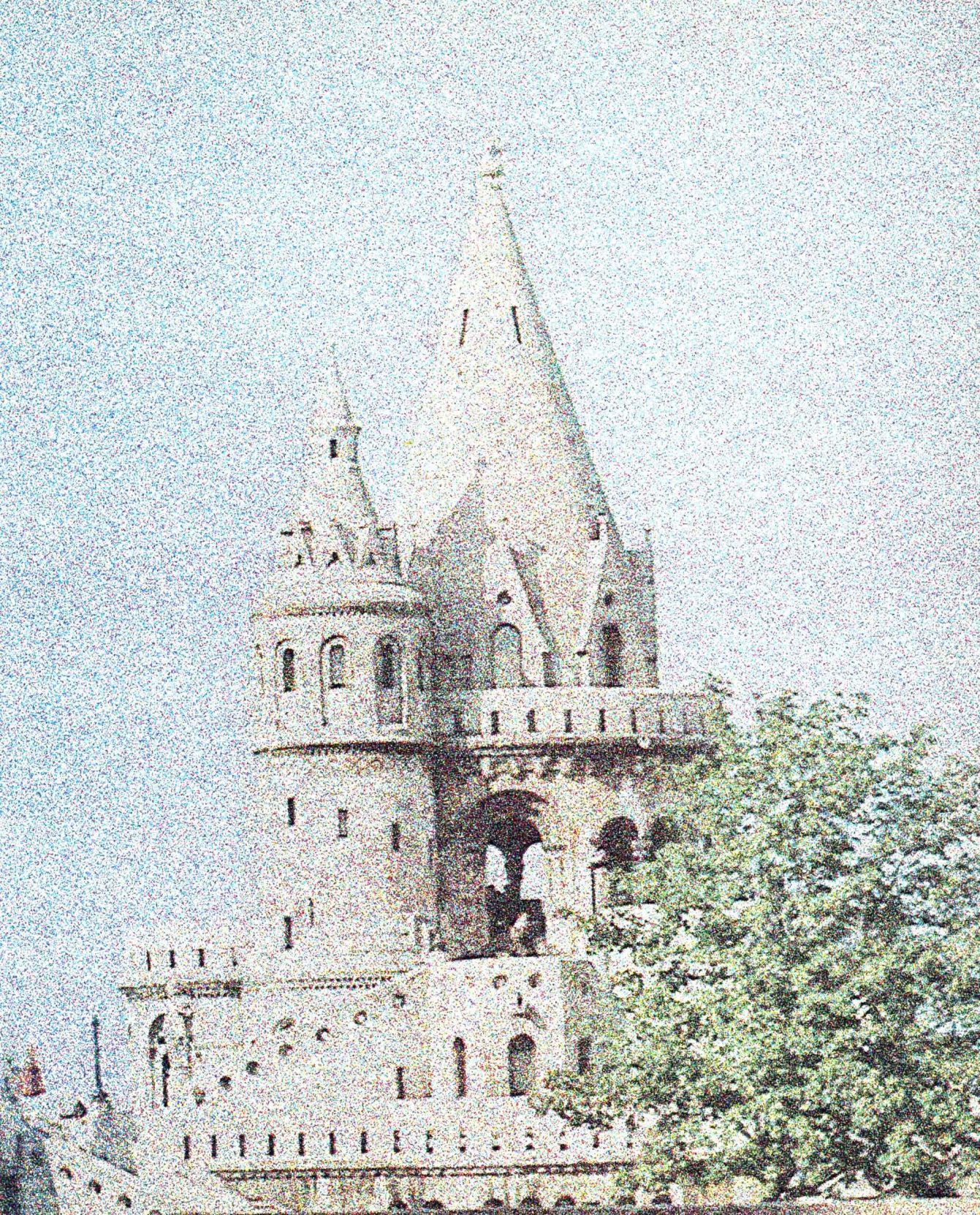
こどもの世界文学25
ほんとうの空色(そらいろ)

昭和46年11月12日　第1刷
昭和50年　第4刷(C)

作　者　ベラ＝バラージュ
訳　者　徳永康元(とくながやすもと)
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2－12－21
電話　東京(03)945-1111〈大代表〉
郵便番号112　振替東京3930
印刷所　図書印刷株式会社
製本所　図書印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
Printed in Japan





漁夫のとりで（ハンガリー）

こどもの世界文学

《諸国編・1》

ほんとうの空色ほか

イソップ作

呉　茂一訳

もくじ

ほんとうの空色……10
きえたあい色の絵の具……11
ふしぎな小使いさん……26
秘密のなかま……40
シルクハットの大雨……54
まっ暗なあなぐら……67
森の中の一夜……83
小さな聖者さま……95
ひとかけらの空……108
きょうだいの国……117
わたしたちの国……117
ふしぎの国……133
きょうだいの国……143

ふしぎの国……174
わたしたちの国……201

物語を読んだあとで

心は空色のゆめでいっぱい　徳永康元……210
ダニューブ川の女王ブダペスト　ジョフィー"パベラ……214
世界の妖精物語　神宮輝夫……218
読書感想文用紙……221
感想文を書くときのこつ……224
「ほんとうの空色」の読書会から　北川幸比古……225
おかあさんのためのハンガリーの歴史と文学　徳永康元……232
訳者・画家の横顔……238

《責任編集》
神宮輝夫
関　楠生
鳥越　信
安藤美紀夫
塚原亮一

＊協力
ハンガリー大使館

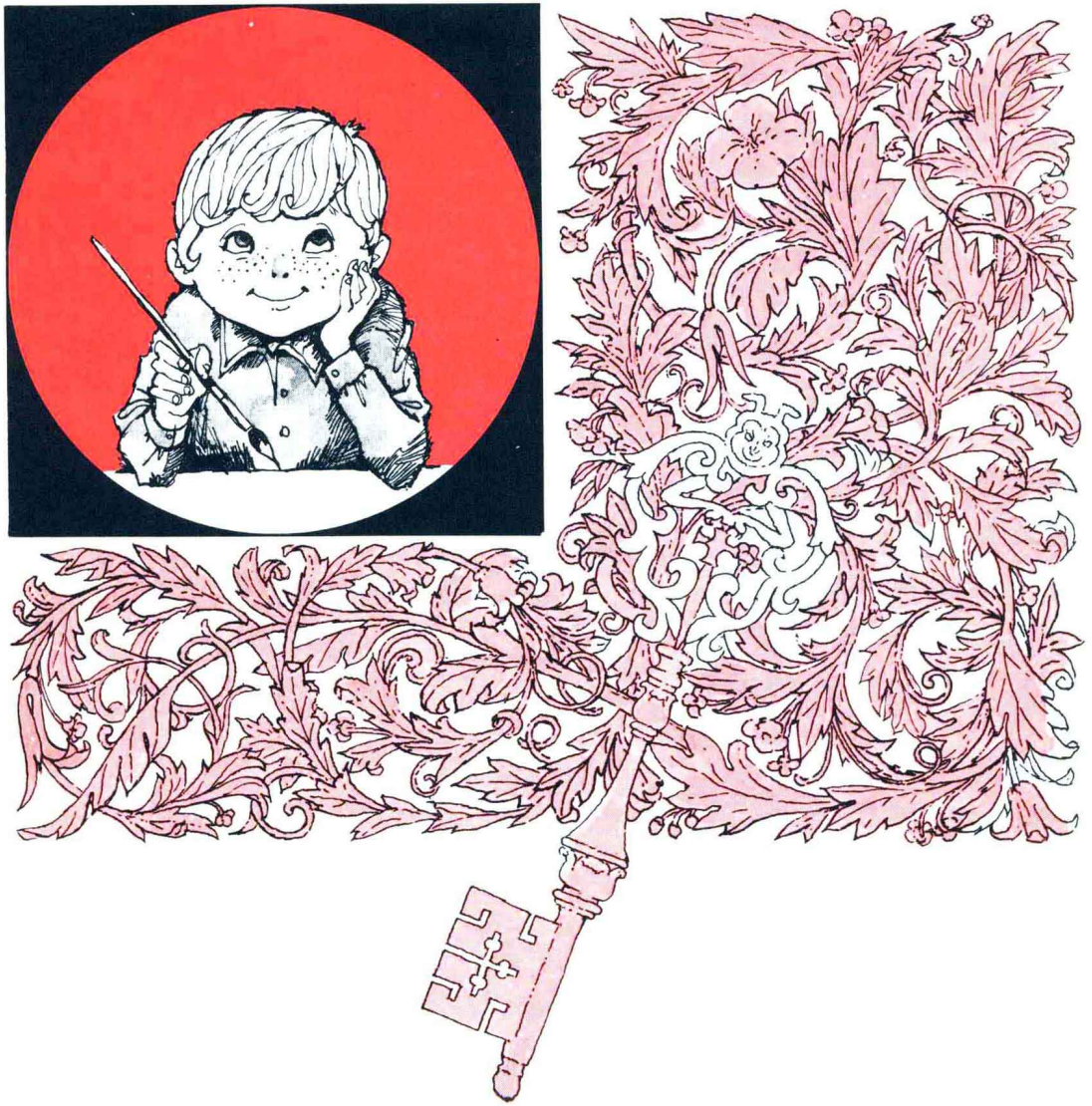
装本　大橋　正
扉　安野光雅
さしえ　鈴木　博
扉写真　井上宗和

ほんとうの空色ほか

ベーラ＝バラージュ作

徳永康元訳

鈴木　博絵



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ほんとうの空色

きえたあい色の絵の具

むかしあるとき、フランツル＝クラーメルという少年がいました。

フランツル＝クラーメルは、あまり成績のいい生徒ではありませんでした。というのは、父親はもう死んでいましたし、母親は、まずしいせんたく屋さんだったので、フランツルが母親のかわりに、せんたく物をはいたつしなければならなかったからです。フランツルが、ちょうどリュックサックをせおうように、大きなかごをせなかにかつぐと、母親はその中へ、アイロンのかかったせんたく物をつめこみ、それからとどけ先のあて名を紙に書いて、フランツルにわたすのでした。

びんぼうなフランツルは、どこへいくにも歩いていかなくてはならなかったので、うちへかえるのは、いつでも夜おそくなりました。だから宿題をじゅんびしていくひまがなくて、あくる日のノワーク先生の授業では、そのばつとして、い

ちばんうしろのこしかけ――つまり、なまけ者の席にすわらされるのでした。

このところ、フランツルは三日もつづけて、そのこしかけにすわらされていました。このことが女の子たちのあいだにも知れわたったにちがいないと思うと、かれは、はずかしくてたまりませんでした。(女生徒たちの教室は、おなじ建物の三階にあるのです。)

その四日めのことです。カール＝シェーンアイヒという生徒が、算数の宿題をしてなかったうえに、地理もぜんぜんおぼえずに学校にきました。

カール＝シェーンアイヒは金持ちの少年で、いつも上品な服を着ていましたし、フランツルのように、よごれた手をしていることもありませんでした。カールは、いつも成績のいい生徒でした。もちろんかれは、フランツルのようにせんたく物をはいたつする必要もなく、うちへかえれば、まいにちいくらでも勉強するひまがあったからです。六時になれば家庭教師がきて、いっしょに宿題をやってくれました。だからいい成績をとるのも、カールにとってはわけのないことでした。でも、この日にかぎって、かれはぜんぜんできなかったのです。そのうえ、ノワーク先生は、教室にはいってくる前からきげんがわるかったので、いきなりカールをどなりつけました。

「それではずかしいとは思わんのかね。さあ、フランツル＝クラーメルとならんで、なまけ者の席にすわるんだぞ。」

「フランツル＝クラーメルと？」
と、なきながら、カールはききかえしました。
「そうとも。さあ、早くならびなさい。」
カール＝シェーンアイヒは、しおしおと本やノートや絵の具箱――かれは美しい絵の具箱をもっていたのです――をかたづけて、みんなのつくえのあいだを、うしろのなまけ者の席まで、なきながら、のろのろ歩いていきました。教室じゅうの生徒は、いっせいにふりむいて、カールのほうを見ました。
フランツル＝クラーメルは、首を深くたれてゆかを見つめながら、自分とならぶことを、みんながどうしてそんなにはずかしがるのだろうか、と考えていました。そして、上品な服を着て、のりのついたまっ白なカラーをしたカール＝シェーンアイヒが、できるだけ自分からとおざかろうとして、こしかけのはしのほうに小さくなっているのを見ると、ちょっとなぐさめてやりたくなりました。
「ねえ、カール。きみが絵の具をかしてくれれば、絵をかいてあげるよ。」
と、かれはカールにささやきました。
フランツル＝クラーメルは絵がじょうずでした。絵のかき方は、ペンキ屋のおじさんからならったのです。まず一軒の家をかいて、まわりをかきねでかこみ、さいごに空を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com